

実践型勉強会を導入しての効果 ～退院支援の質と向上を目指して～

松永 美代 佐藤 斗子 植松 知子 牧野 仁美

静岡赤十字病院 3-7病棟

要旨：3-7病棟は整形外科病棟で増床前は周術期の患者を主に受け入れ、患者は手術後1週間で他病棟へ転床していた。看護師は入院から退院までの関わりが少ない状況であった。2016年11月整形外科病棟が増床し、さらに円滑な退院支援が求められるようになった。今回、看護師が退院支援を意識し、よりアセスメント力が向上できるよう実践型勉強会を導入したので報告する。

Key words：退院支援，実践型勉強会，整形外科

I. はじめに

当院の整形外科では年間1,500件以上の手術が行われている。3-7病棟は周術期の患者を主に受け入れていた。患者は手術後1週間で他病棟へ転床することになり、看護師は退院までの関わりが少ない状況であった。2016年11月整形外科病棟が増床し、看護師は入院から退院まで関わるようになり、円滑な退院支援が求められるようになった。そこで知識の習得として、地域連携パスを通して退院支援の流れ、ソーシャルワーカーによる介入の視点について勉強会を行なった。また、スクリーニング項目を精選し、該当患者のカンファレンスを充実させた。これらにより、円滑な退院支援の提供、退院支援加算の漏れ防止などの一定の効果は得られた。しかし、支援ニーズを要するケース介入の遅れは解消されなかった。

今回、看護師が退院支援を意識し、よりアセスメント力が向上できるよう実践型勉強会を導入した。

II. 目的

退院支援に関するアセスメント力の向上を目指す。

III. 方法

1. 実際の病棟と同じ条件になるように工夫した勉強会を開催した。これを実践型勉強会と命名した。
2. 勉強会実施半年後にスタッフにアンケートを行なった。
3. アンケートの結果から成果と課題を考察した。

IV. 倫理的配慮

1. アンケートで得られた情報は学会発表にて使用することを紙面と口頭にて説明した。
2. 得られた情報は厳密に保管し発表終了後は適切に処理を行なうことにした。
3. 匿名性を維持し個人に不利益が生じないように配慮した。

V. 勉強会の実際

1. 事例:日常経験するケースに基づき退院先の選択肢の多い事例とし、情報量は入院時に得られる程度の最低限にした。
2. 方法：グループワーク（4～5人で4グループを作成）
 - 1) 各グループメンバーは、日頃のカンファレンスを意識し、コーディネーター役と経験年数の異なる看護師で構成した。

- 2) 事前に配布したアナムネ用紙から、情報をグループで確認、整理し、足りない情報を、家族役の担当者から情報収集した。
- 3) 患者のゴールと介入に必要な情報・介入方法の視点で模造紙にまとめ、最後に各グループの発表をした。

VI. 結果

1. 実践型勉強会での発表、その後の実践から見たこと

グループワークはコーディネーターが指揮をとり活発に行われていた。発表内容は退院の方向を導くまでのアセスメントが患者、家族の思いに沿ったものであった。勉強会後のカンファレンスでは視点が広がり、患者の思いや方向性を示す掲示板の情報を共有し、近況のリハビリの内容から患者の問題点を明らかにしている。

2. 実践型勉強会から半年後のアンケート結果

16人に配布し15人から回答あり、回収率94%

1) 実践型勉強会后、多くの情報が集められるようになりましたか (図1)。

- (1) できるようになった (13名)
 - ・情報収集のポイントがわかった。
 - ・視野が広がり注意して患者を見るようになった。
- (2) できていない (1名)
 - ・勉強会后と情報量は変わらない。
- (3) 無回答 (1名)

2) 実践型勉強会后、集めた情報を活用できていますか (図2)。

- (1) できている (12名)
 - ・どうしたら家に帰れるのか考えて患者に伝えている。
 - ・退院後のリハビリを見据えて入院中のリハビリを考えるようになった。
- (2) できていない (2名)
 - ・自信がない。
- (3) 無回答 (3名)

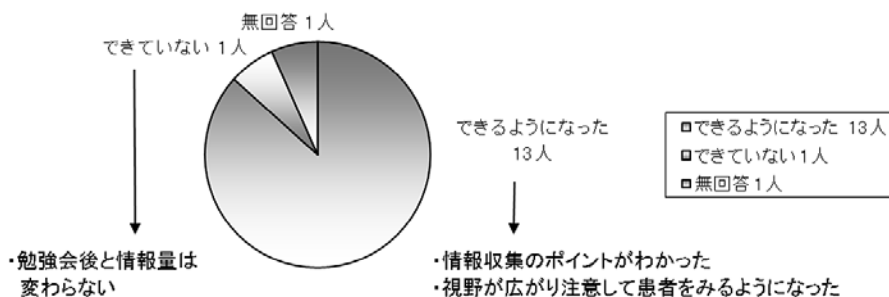


図1 実践型勉強会后、多くの情報が集められるようになったか

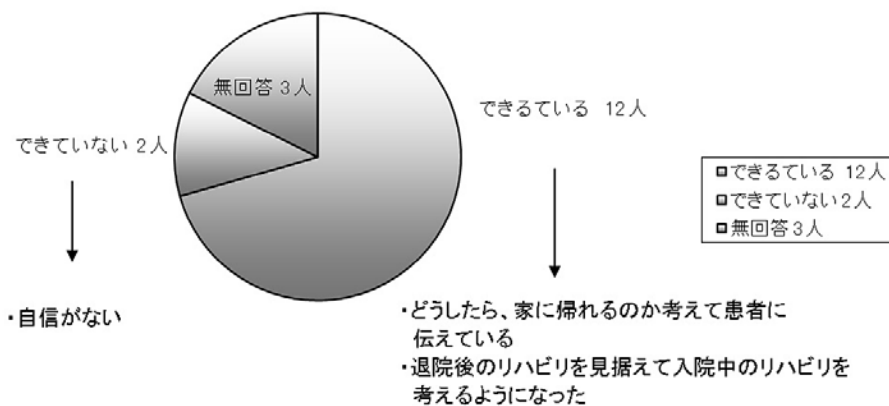


図2 実践型勉強会后、集めた情報を活用できていますか

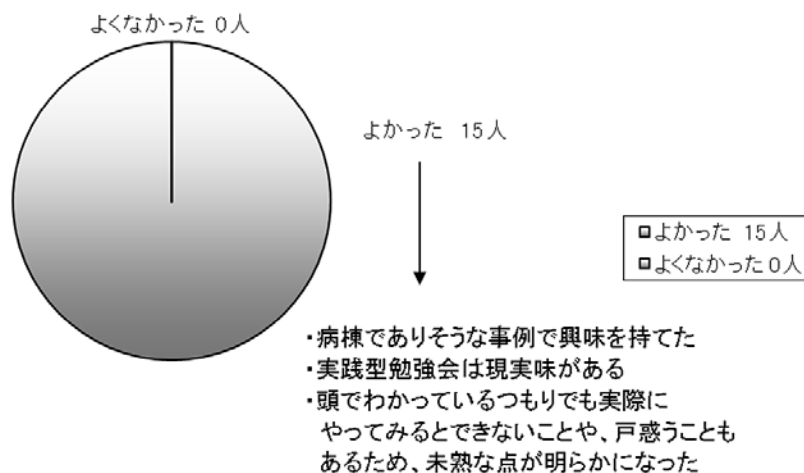


図3 講義形式の勉強会に比べて、実践型勉強会はよかったですか

3) 講義形式の勉強会に比べて、実践型勉強会はよかったですか (図3).

(1) よかった (15名)

- ・病棟でありそうな事例に興味を持てた.
- ・実践型勉強会は現実味がある.
- ・頭でわかっているつもりでも実際にやってみるとできないことや、戸惑うこともあるため、未熟な点が明らかになった.

(2) よくなかった (0名)

VII. 考察

実践型勉強会は、退院支援に必要な情報を考えるヒントになった。リハビリの経過から退院後の生活をイメージし、退院支援を意識できるようになった。事例の内容は、日常的な題材に興味を持ちやすかった。また、方法は日頃のカンファレンス形式であったため、以後の実際のケースに結びつけやすく応用しやすかった。アセスメントは情

報収集から始まることから、多面的な情報を収集できるようになってきている。しかし、集めた情報の活用に自信が持てないという意見があった。情報から分析したことを確認し、承認、評価し、不足しているところはサポートが必要である。プライマリーナースが自信を持てるようにコーディネーターは、教育的なアドバイスできるようにマネジメント力を高めたいと考えている。

VIII. おわりに

実践型勉強会は、臨床現場での退院支援に必要な情報収集の円滑化、患者、家族の思いを反映した介入方法の選択に有効だった。今後の課題は、プライマリーナースとしての意識を持ち自ら問題を発信できることである。また、コーディネーターの推進力が大きいいため、コーディネーターがマネジメント力を高めるような勉強会を検討している。